

「生命の価値」をめぐる言説について

渡 辺 啓 真

本発表では、「生命の価値」に関する議論をめぐって登場するさまざまな価値(語)の意味、それが焦点をあてる「生命」の範囲・状態は、かならずしも自明のものではなく、したがって、それらを用いることによって対立する議論は終息しない、という点に注目する。むしろこれらの価値(語)が用いられることによって、何らかのさらなる解釈あるいは捉えなおしを要求している「問い」の所在が示されているのであり、そうした問いの所在を捉えることこそ、まずもって重要であるという点を強調したい。

さて、「生命」をめぐって付与される価値語には、「価値 value, worth」「内在的価値 intrinsic value」「固有の価値 inherent value, worth」「聖性 sanctity」「尊厳 dignity」といっ

た、生命そのもの、あるいはその一定の特徴について用いられるものがあり、さらに生命に対するわれわれの態度に関わる価値語として、「畏敬 reverence」「尊重 respect」「権利 right」といった表現がしばしば用いられる。以下で、医療倫理、環境倫理上の議論におけるいくつかの事例をみてみたい。

「尊厳」という言葉は、「生命の尊厳」「人間の尊厳」「人格の尊厳」といった表現においてしばしば登場する。これらの表現に注目するだけでも、「尊厳」が「生命一般」あるいは「個体としての生命」、「種としての人類」あるいは「個体としての人間」さらに「人格的存在」といった異なる対象に述語づけられているのがわかる。こうした文脈で用いられてきた「尊厳」は、個人の人權に基づく近代社会の人間観と整合するものとして漠然と受け入れられてきた。

しかし、近年議論の的となっている「(尊厳)死」という言葉は、従来それほど意識されてこなかった「尊厳」という言葉がもつ曖昧さを明るみに出すことになった。「安楽死」のうち「消極的安楽死」とよばれるものとはば重なるものが「尊厳死」と呼ばれている。この表現が選択された理由としては、「(非任意的)安楽死」という語が持つ

「生きるに値しない生命の抹殺」という優生思想への連想を避けるためという点が考えられるが、とくに日本においては、「尊厳」という日本語が「sanctity」と「dignity」の両方の訳語として用いられること（「生命の尊厳」という言葉の多義性）から、「尊厳死」が人間の生命の平等な尊重に矛盾しないかのような語感を与える、という点であろう。

しかし、生命の平等な尊重、不可侵性 *inviolability* を意味するのは、*SO L (sanctity of life)* 「生命の聖性」であり、「尊厳死 *death with dignity*」は、「人間の生をその尊厳があるとされる状態において終わらせる」ということであり、むしろ *Q O L (quality of life)* 「生命の質」の発想に連なるものに他ならない。*SO L* の立場は、「延命至上主義」ないし「生命至上主義 *vitalism*」というややマイナスの価値を帯びた語で尊厳死擁護の立場からは表現される。逆に、*SO L* の立場からは、尊厳死擁護は、人間の生命を「生物学的生命」と「人格的生命」に区別することによって、生きるに値する生命とそうでない生命の区別を持ち込む立場としての「生命の質」容認派だと批判されることになる。また、*Q O L* が、元来は「生活の質」と訳すべき内容を含み、環境権や患者の権利など、より生きやすい環境・生存条件を求めるという問題系のなかで登場した言葉であるこ

と、したがって尊厳死に関わる文脈においては無視できない意味のずれが生じかねないことにも注意すべきであろう。また、人工妊娠中絶や新たな生殖技術をめぐる議論においては、胎児の権利があるかどうか、あるとすればどの時点からかといった論争において、受精の時点から尊重すべき生命ととらえる *SO L* の立場と、パーソン論（後述）に基づいて一定の能力が獲得される時点からとする立場とを両極として議論がなされている。

環境倫理をめぐる議論においては、「動物の権利」を擁護するトム・リーガンによる、「一歳以上の高等哺乳類の動物個体の生命に認められる〈固有の価値〉に基づいて動物の生きる権利 *right to life* を認めるべきだ」という主張、あるいは、快・苦を感じる感覚能力を基準とする功利主義の立場から、そうした快・苦の経験そのものに「内在的価値」を認め、動物の快・苦への配慮を求めるピーター・シンガーらの動物解放の主張に、「生命の価値」に関わる価値語が登場する。

また、生態系の保護を主張する環境倫理の立場のなかには、動物以外の自然物にも内在的価値を認める立場、それも、個体に対してではなく、生態系という生命システムに内在的価値を認める生態系中心主義 *ecocentrism* と呼ばれ

る立場がある。この場合には、個々の生命体の活動を支えているシステムとしての生命活動そのものに価値の焦点があてられており、「生命中心の平等 *biocentric equality*」といった理念が掲げられたりもするが、その場合の「平等」の意味するところは必ずしも明らかでなく、動物解放やヒューマニズムなど個体重視の立場からは全体主義的であるとの批判を受けることになる。

以上のような論争状況を見るだけでも、「生命の価値」に関わる表現が論者によって非常に異なる含意で用いられていることがわかる。こうした状況を一元的な基準によって整理しようとする理論のうち医療倫理から動物への配慮までをカバーするものとして主流となっている立場は、「パーソン論」と呼ばれ、尊重や権利といったわれわれの行為・選択を規制・拘束する価値づけを与える基準として一定の能力（感覚能力、自己意識、反省能力など）の有無に訴える。医療倫理上の問題において「自己決定権」の尊重がもつとも重視されることの根拠としてパーソン論は大きな役割をはたしおり、動物の解放・権利論においてもパーソン論による「線引き」が主張されていると言っている。

しかし、パーソン論がその範型とする「成人した正常な

人間」という基準によって生命の価値とりわけ尊厳の有無を判断しようとすることは、われわれが「生命」に対しておこなう価値づけの多様性や〈厚み〉をあまりに切り詰めていると言わざるをえない。パーソン論とQOLが結びつくとき、パーソン論の基準からはずれる（自己決定の能力を欠いた）「生命」は「それ自体としては価値なきもの」の領域へと追いやられることになる。われわれはまず、人格的生命を時間軸上の線引きによって確定されるものとのみ解することをやめ、〈パーソン〉を〈人称性〉の問題としてさらに広い視野から再構成し、人格の持つ歴史性、伝記性、他者との人称的な関係性を組み入れたものにしていく必要があると思われる。それは、「自己決定」の「自己」をより広い文脈において捉えなおし、自己決定の内容そのものを豊かにする人間関係を生きることへと目を向けることを意味するであろう。そしてさらに、生態系などの自然環境の価値づけを、個の軽視に陥らない形でわれわれの自己決定のうちに組み入れていく方が探られるべきであろう。